

地域みんなの好々爺

古澤孝夫さん(92歳)



TAKAO FURUSAWA

大 正15年生まれ、今年9月で92歳となる古澤孝夫さん。
「上げ潮も 限りとなれり 暮れがたの 橋わた
りゆく 人らの見ゆる」

自信作が集まった句集を片手に笑みを見せる。定年退職後、80歳から独学でパソコンを覚え、自らまとめあげたものだという。先の句は昭和33年の作品。自宅そばの八幡川を詠んだものだ。東日本大震災でその自宅は流出。登米市南方に仮設住宅が整備されると、奥さんと2人で移り住んだ。もともと社会的でお世話役を買って出る性格もあり、大所帯の仮設住宅団地のリーダーになるのにさほど時間はかからなかったし、期待通りまとめあげていた。自治会運営はもちろん、趣味の活動(川柳クラブやグラウンドゴルフ)にもなくてはならない存在となった。3年前、志津川東地区に整備された造成地に自宅を再建。「やっぱり、水と空気がうまいね」と古里の素晴らしさを改めて実感しているという。

「仮設住宅で知り合った学生さんたちが、何回も来てくれて、それがとてもうれしいんだ」と目を細める。好奇心旺盛な古澤さんは、新しい町で畑作業も、パソコンもグラウンドゴルフも人付き合いも楽しくこなす気さくな好々爺だ。「今を楽ししく生きる」そんなあり方を教わった気がする。

地域おこし協力隊員が行く!

南

三陸町に移住し起業活動を行う「地域おこし協力隊」。佐藤和幸さんは2017年春に着任し、現在2年目。「事業創造支援員」という立場のもと、自身がプロジェクトをもち起業するのではなく、町に移入してきた起業家たちのサポートをするのが役目だ。「起業家といっても起業経験のない人たちがほとんどなので、一緒に伴走しながら事業を立ち上げて行くお手伝いをしています」

福島県新地町出身の佐藤さん。大学を卒業した後電力関係の会社に勤務し、財務や経理、総務、危機管理などさまざまな部署を担当したが「原発事故後、電力会社にいた経験もあり、被災地に対して何か責任のようなものを感じていた。南三陸で活動したいと思うきっかけの1つでもある」と、この頃の経験が今にもつながっている。震災後は行政書士の資格を生かして被災者向けの相談業務に関わっていたこともあるという。「財務・経理・法律など今までの経験や知識を南三陸でも生かしたい」と意気込む。

「南三陸町には、新しいことをやってみようという意欲や前向きさ、実際に動いてみる力を持った人たちが、たくさんいる。一緒になって地域をつくっていききたい」と、町の今後の大きな動きに期待を膨らませている。

KAZUYUKI SATO



佐藤和幸さん

オールマイティに活躍し、起業家をサポート